

2022年10月2日

## 説教「今やわたしたちのために」ヘブライ人への手紙9章23～28節

牧師 小林 恵

本日与えられたヘブライ人への手紙9章23節はその冒頭で、「天にあるものの写し」と言っています。これはまさしく、この世界のことです。正確には24節を見ればわかるように、神殿の聖所のことを指していると思われそうですが、その本質はこの世界全体のことを意味していると言えます。つまり、この世界は天にあるものの写しであると言うのです。

この世界が天の写しであるならば、その原本はまさしく天ということになります。この両者の間には歴然とした違いがあるということが、ここに暗示されています。天にあった青写真は、今やそれとは違った姿になってしまっているということです。

神が天地創造を完成された時、この世界は「極めて良かった」（創1：31）と聖書は記しています。しかし今、この世界ははたして「極めて良い」のでしょうか。欲望のために人の命を奪い合い、環境や生態系が破壊され、あらゆる命が軽んじられる、未来に希望を持たないようなこの世界の現実の姿があります。

「この世界は、清められねばならない」と御言葉は語りかけています。何によってか、それは、「これらのものによって」と言われています。19節から22節にこう記されています。「若い雄牛と雄山羊の血を取って、契約の書自体と民全体とに振りかけ、『これは、神があなたがたに対して定められた契約の血である』と言ったからです。また彼は、幕屋と礼拝のために用いるあらゆる器具にも同様に血を振りかけました。こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです」。人間の罪は、かつては牛や羊などの動物の血によって清められたのだと、そのように聖書は記しています。

しかしながら、これによって本当に罪が清められたのかというと、そうではありませんでした。年に一度「大贖罪日」と言われる日に犠牲の供え物の儀式において大祭司は、動物の血をもって聖所に入って行き、それを祭壇の前で振りかけたといえます。この儀式が完全なものであるならば、毎年行う必要はなかったはずですが、にも関わらず繰り返し行われたのは、繰り返し犯し続けた人間の罪が人間自身の手による犠牲によっては清められない、完全にはぬぐい去ることができなかったからです。

そのために、神は御子イエス・キリストをこの世界に遣わされたのだと24節は語っているのです。かつて大祭司が人間の建てた聖所という場所に入って犠牲の儀式を執り行ったようにではなく、キリストは人間の手が決して及ばない天という場所に入られて、私たちのためにこの世界に降りて来てくださったのです。その行き着く先は、十字架による御自身のただ一度の奉献でした。それは、天地創造以来のあらゆる罪を、主の十字架が完全に清められたことを意味しています。しかも、十字架の死の先には、主の復活の恵みがあります。主の十字架は、まさに新しい復活の命をさし示していたのです。ただ一度のキリストの死は、復活の命、永遠の命となって、私たちに与えられたのです。

この希望をもって、私たちは日々を歩んでいるのですが、28節にいささか気になる「二度目」という言葉があります。つまりキリストは、もう一度この世界に来られるということです。いわゆる、終末における再臨です。

なぜもう一度やって来られるのか、28節を見ると、それは罪を負うためではなく、御自分を待ち望んでいる人たちに救いをもたらすために現れてくださるのだと記されています。「救いをもたらすために」とは言うなれば、キリストの“確認”です。キリストがもう一度来てくださり、私たち皆を確認してくださる、それが再臨の恵みです。何のために確認されるのでしょうか。それは、キリストの十字架によって救われた人々をあらためて救いの恵みへと導かれるために、主は一人ひとりの心を確認してくださるのです。

手漕ぎボートを漕ぐとき、態勢としては後ろを見つめながらオールを漕ぎ、前進していきます。これこそ、私たちの歩みにほかなりません。2千年前の主の十字架を見つめながら、オールを漕ぐように精一杯なすべきことを行いながら、希望をもって前方に進んでいくのです。それは、私たち一人ひとりを確認するために、もう一度やって来られるキリストに希望を抱いて進んで行くということです。

今日私たちは、献堂記念礼拝としてこの礼拝をささげています。キリストの恵みを感謝しながら前進する私たちに、主なる神は、共に礼拝をささげる教会堂を与えてくださいました。今から130年ほど前の1890年、宣教師の働きによって九段下の飯田町に教会堂が建てられて以来、同仁キリスト教会は幼稚園の働きとともに今日に至るまで主を宣べ伝える福音宣教の働きを担ってきました。そして70年前、この目白台の地に教会堂と幼稚園が与えられ、さらに40年前には新しい教会堂と集会施設をも備えられました。この建物を通して礼拝や保育はもとより、様々な集会や活動の機会を提供しながら近隣の人たちとの交わりを深め、地域に根差した伝道活動が進められてきました。思えば、二度の世界大戦と関東大震災の中で会堂が倒壊したり破壊されたり、移転を余儀なくされたりもしました。困難や苦難を耐え忍びつつ、一步一步前進してきました。「今やわたしたちのために」、2千年前この世界に遣わされたキリストに信頼と希望をおいて歩んできたからこそ前進でした。時代時代に相応しい形で礼拝と伝道の場を主が与え続けてくださったからこそ、同仁キリスト教会は幾多の困難にもめげず、数々の苦難を乗り越えてくることができたのだと信じています。この御守りと導きに感謝し、与えられているこの教会堂をなお一層地域のために、神の働きのためにささげていきたいと思えます。

「今やわたしたちのために」、十字架の恵みを与えてくださり、日々私たちのもとをたずねてその心を確認してくださる主は、私たちの歩みを御心にかなった主の道へと軌道修正してくださいます。私たちもまた、今や主のために生きるものでありたいと思えます。キリストの愛の大きさ、高さ、深さ、広さを確認していくような日々の歩みでありたい、そしてその愛の恵みにどのようにしてお応えしていくことができるのかを、共に祈り求めていきたいと願っています。